

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第364集

那珂遺跡9

——那珂遺跡群第33次調査報告——

1994

福岡市教育委員会

那珂遺跡 9

——那珂遺跡群第33次調査報告——



遺跡調査番号 9122

遺跡略号 NAK33

1994

福岡市教育委員会



調査区全景（南東から）



014 (S E) 出土

序

北方に広がる玄界灘の海を介して大陸と対面した福岡では、その人、物、文化の交流が先史時代より絶え間なく続けられてきました。この地の利、歴史も踏まえ福岡市は現在、「海と歴史を抱いた文化の都市」、「活力あるアジアの拠点都市」をめざし町づくりを進めているところでもあります。

教育委員会においては、こうした町づくりの一環にもなりうる文化財の保護と活用に努めています。また、多様な開発でやむなく消滅する埋蔵文化財については、発掘調査による記録保存を講じて後世に残そうと考えています。

当調査地点の那珂遺跡は魏志倭人伝に記載された「奴國」の拠点として、重要な道構、遺物が発見され、最近、特に注目を浴びている地区です。今回も弥生時代の集落、古代の官衙の一端を見いだすことができました。

本書は、こうした調査成果を収めたもので、研究資料とともに、埋蔵文化財に対する御理解と活用への一助となれば幸いです。

最後に、調査に際しご協力頂いた、地権者、工事関係者、関係各位の皆様に厚くお礼申しあげます。

平成6年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花 剛

例　　言

1. 本書は福岡市博多区那珂二丁目249-1の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は荒牧宏行が担当し、執筆した。
3. 本書掲載の遺構、遺物実測、写真撮影は荒牧が行なった。遺物実測については一部、杉山、平川に助成していただいた。
4. 净書は井上加代子、荒牧が行なった。
5. 本書掲載の実測図、遺物等を含め調査で得られた資料類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管され公開して活用していく予定である。

凡　　例

1. 本書使用の方位は磁北である。
2. 掲載図面のアミ部分については各説明を加えている。
3. 本書使用の遺構名については本文（P-8）に説明しているので参照していただきたい。

本文目次

I	はじめに	
(1)	調査に至る経過	1
(2)	調査体制	1
II	位置と環境	
(1)	地形	5
(2)	周辺道路	5
(3)	那珂、比忠遺跡群	7
III	調査の記録	
1	調査の方法	8
2	層序	8
3	調査の概要	8
4	遺構と遺物	9
(1)	壁穴住居跡 (SC)	
001	(SC)	9
011	(SC)	9
012	(SC)	10
007	(SC)	10
013	(SC)	11
016	(SC)	14
(2)	掘立柱建物跡 (SB)	
017	(SB)	16
018	(SB)	17
(3)	井戸	
014	(SE)	18
015	(SE)	24
(4)	土塙 (SK)	
003	(SK)	27
(5)	性格不明土塙 (SX)	
002	(SX)	27
004	(SX)	27
006	(SX)	27
(6)	溝 (SD)	
005	(SD)	29
009	(SD)	29
(7)	その他 (柱穴、遺構検出時出土遺物)	29
IV	小結	30

挿図目次

Fig. 1	周辺地図 (1/25,000)	2	Fig.17	017 (SB) 実測図 (1/60)	17
Fig. 2	ID地図 (明治23年作成1/25,000)	3	Fig.18	014 (SR) 実測図 (1/60)	18
Fig. 3	那珂道路群調査地点位置図 (1/8,000)	4	Fig.19	014 (SE) 出土遺物実測図 1 (1/4)	19
Fig. 4	調査点位実図 (1/500)	6	Fig.20	014 (SE) 出土遺物実測図 2 (1/4)	20
Fig. 5	第26次、第33次調査地点地形図 (昭和5年作成1/5,000)	7	Fig.21	014 (SE) 出土遺物実測図 3 (1/4)	21
Fig. 6	遺構配置図 (1/200)	折り込み	Fig.22	014 (SE) 出土遺物実測図 4 (1/4)	22
Fig. 7	001 (SC) 実測図 (1/60)	9	Fig.23	015 (SE) 実測図 (1/60)	24
Fig. 8	001 (SC) 出土遺物実測図 (1/4)	9	Fig.24	015 (SE) 出土遺物実測図 1 (1/4)	25
Fig. 9	011, 012 (SC) 実測図 (1/60)	10	Fig.25	015 (SR) 出土遺物実測図 2 (1/3, 1/4)	26
Fig.10	011 (SC) 出土遺物実測図 (1/4)	10	Fig.26	003 (SK) 実測図 (1/40)	27
Fig.11	007 (SC) 実測図 (1/60)	11	Fig.27	002 (SX) 出土遺物実測図 (1/4)	28
Fig.12	007 (SC) 出土遺物実測図 (1/4)	11	Fig.28	004 (SX) 出土遺物実測図 (1/3)	28
Fig.13	013 (SC) 実測図 (1/60)	12	Fig.29	006 (SX) 出土遺物実測図 (1/2, 1/4)	28
Fig.14	013 (SC) カマド実測図 (1/20)	13	Fig.30	005 (SD) 出土遺物実測図 (1/4)	29
Fig.15	013 (SC) 出土遺物実測図 (1/4)	15	Fig.31	009 (SD) 十層断面図 (1/40)	29
Fig.16	016 (SB) 実測図 (1/60)	16	Fig.32	柱穴出土遺物実測図 (1/4)	30
			Fig.33	002 (SX) 出土石器実測図 (1/1)	30

図版目次

PL. 1	遺構完掘状況 (南東から) 調査区南部完掘状況 (北から)
PL. 2	001 (SC) 完掘状況 (南から) 011 (SC), 012 (SC) 完掘状況 (北から) 007 (SC) 完掘状況 (南から)
PL. 3	013 (SC) 完掘状況 (東から) 013 (SC) カマド完掘状況 (南から)
PL. 4	017 (SB) 完掘状況 (南から) 018 (SB) 完掘状況 (南から) 014 (SE) 通物出土状況 (北から)
PL. 5	014 (SK) 下部遺物出土状況 (東から) 015 (SE) 遺物出土状況 (東から) 003 (SK) 完掘状況 (西から)
PL. 6	009 (SD) 断面 (北から) 出土遺物 (SC, SK, SP)
PL. 7	014 (SE) 出土遺物
PL. 8	014, 015 (SE) 出土遺物

I はじめに

(1) 調査に至る経過

本調査地点は福岡市博多区那珂二丁目249-1に位置する。平成3年6月24日に地権者 川辺タミエさんから貨貸共同住宅建設に先立って福岡市教育委員会埋蔵文化財課へ埋蔵文化財事前審査願が提出された。当課では事業計画地が那珂遺跡群に呼称される埋蔵文化財包蔵地内であるため試掘が必要と判断した。同年7月9日に試掘が実施され、遺跡の存在が認められた。その後、工事関係者も含め協議を重ね、遺跡が破壊を受ける建築地内を発掘調査する事になった。

調査は同年9月2日～10月14日にかけて行なわれ、調査面積は275m²を測る。

なお、前年の平成2年度に同敷地内で先行する共同住宅建築地を那珂第26次調査として実施した。従って、建設事業が2年にわたって実施され、発掘調査が第26次と第33次に分断した形となった。第26次調査報告は次年度に刊行する予定である。

(2) 調査体制

発掘調査は以下の組織で臨んだ。

調査主体：福岡市教育委員会

調査総括：埋蔵文化財課長 折尾 學 埋蔵文化財第2係長 塩谷勝利

事前審査：文化財主事 横山邦雄 係員（試掘担当）加藤良彦 宮井哲朗

庶務：埋蔵文化財第1係 吉田麻由美

調査担当：埋蔵文化財第2係 荒牧宏行

調査作業員：柴田 博 松井一美 三浦義隆 権藤利雄 石橋テル子 徳永ノブヨ 萬スミヨ

村崎祐子 村上エミカ 村上エミ子 その他

整理作業：池見恭子 安部国恵 田村妙子 山口英子 片野ゆき子 小西千晶 品川伊津子 根本哲也 海上野悦代 坂井美穂



Fig.1 周辺遺跡(1/25,000)

- | | | | |
|-------------|-------------|--------------|-------------|
| 1. 那珂、比恵遺跡群 | 8. 笹原遺跡群 | 15. 三宅 C 遺跡群 | 22. 三宅庵寺 |
| 2. 那珂深ノサ遺跡 | 9. 箕輪 A 遺跡群 | 16. 三宅 B 遺跡群 | 23. 三宅岩野瓦窯址 |
| 3. 板付遺跡 | 10. 五十川遺跡群 | 17. 野間 B 遺跡群 | 24. 大橋 B 遺跡 |
| 4. 板付水田遺跡 | 11. 井尻 A 遺跡 | 18. 大橋 A 遺跡群 | 25. 和田藪池遺跡 |
| 5. 高畠遺跡 | 12. 井尻 B 遺跡 | 19. 大橋 D 遺跡群 | 26. 三筑生産遺跡 |
| 6. 和田 D 遺跡群 | 13. 井尻 C 遺跡 | 20. 大橋 C 遺跡群 | |
| 7. 諸岡 B 遺跡群 | 14. 横手遺跡群 | 21. 三宅 A 遺跡群 | |



Fig.2 旧地形図(明治23年作製)(1/25,000)

- | | | | |
|-------------|------------|------------|-------------|
| 1. 比河、比高遺跡群 | 8. 笹原遺跡群 | 15. 三宅C遺跡群 | 22. 三宅庵寺 |
| 2. 那列深ヲサ遺跡 | 9. 蒲岡A遺跡群 | 16. 三宅B遺跡群 | 23. 三宅岩野瓦窯址 |
| 3. 板付遺跡 | 10. 五十川遺跡群 | 17. 野間B遺跡 | 24. 大橋B遺跡 |
| 4. 板付水田遺跡 | 11. 井尻A遺跡 | 18. 大橋A遺跡 | 25. 和田田堀池遺跡 |
| 5. 高畠遺跡 | 12. 井尻B遺跡 | 19. 大橋D遺跡 | |
| 6. 和田D遺跡群 | 13. 井尻C遺跡 | 20. 大橋C遺跡 | |
| 7. 蒲岡B遺跡群 | 14. 横手遺跡群 | 21. 三宅A遺跡群 | 26. 三筑生産遺跡 |

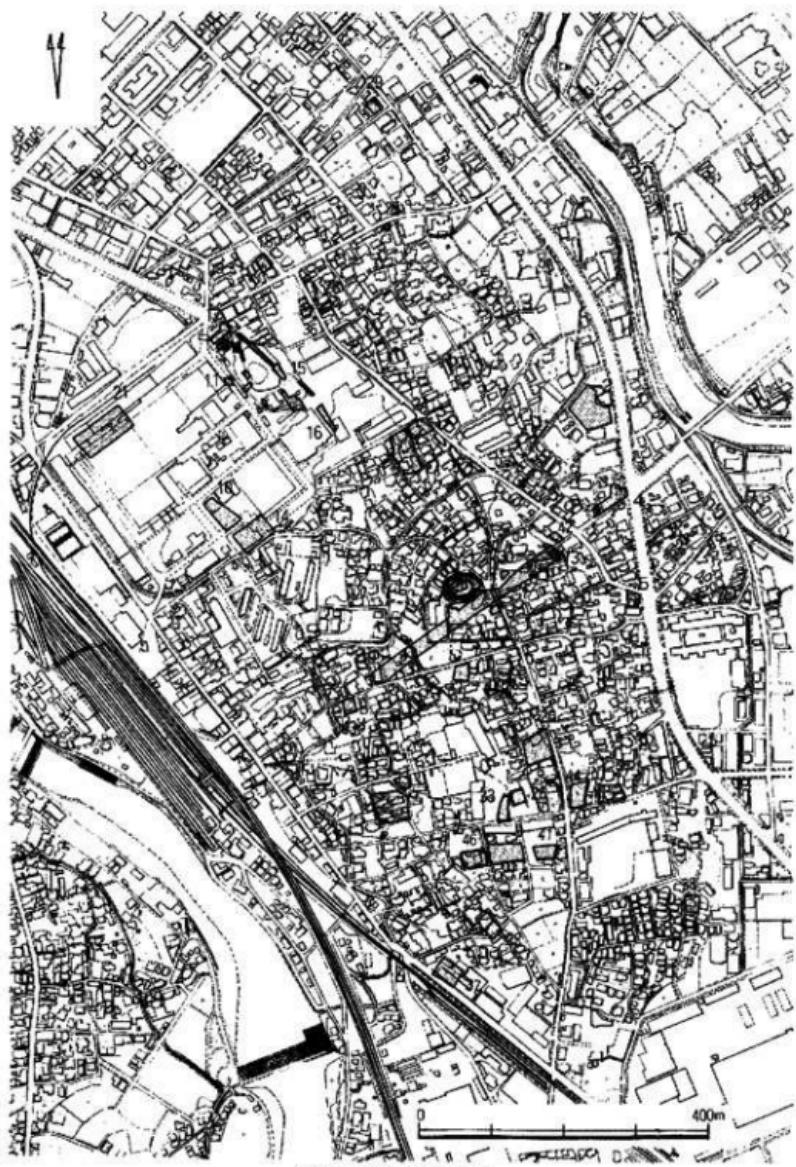


Fig.3 那珂遺跡群調査地点

II 位置と環境

(1) 地形

北側を玄界灘の海に面し、後背に三郡山塊、背振山塊を控えた福岡市の平野部は派生した丘陵より東から柏原平野、福岡平野、早良平野、糸島平野に分けられる。那珂遺跡はこの狭義の福岡平野のほぼ中心に位置する。

福岡平野は東を月隈丘陵、西を平尾丘陵に限られ、その中央を三笠川、那珂川が流下する海岸平野である。平野部を構成するのはこの2河川とその支流によって形成された沖積地と阿蘇火砕流の堆積物からなる中位段丘面である。中位段丘面は南は春日市の須玖付近から北は福岡市の比恵付近まで断続的にのびて埋没していく。さらに北側の博多は浜堤列を有した砂丘からなる。那珂遺跡群はこの中位段丘面の標高7~13mにのる。

(2) 周辺遺跡

ここでは本調査の中心をなす弥生時代と奈良時代について概略を記す。

魏志倭人伝の「奴」国に比定される福岡平野は特に春日市の須玖・岡本付近、福岡市の那珂、比恵遺跡群を中心とした中位段丘面に密度濃く遺構が検出されている。

弥生前期においては著名な板付遺跡で夜白・板付I式期の水田跡、2重環塁集落が発見されている。板付田端では細形銅劍、板付遺跡整備に伴う確認調査では時期が降るが小銅鏡が出土している。最近、話題を呼んだ那珂遺跡群第37次調査では夜白期の2重環塁が検出された。中期以降の集落の拡大、遺跡の増加は他の地域同様であるが、その遺構、遺物の多さは当時の繁栄振りを示唆している。前漢鏡、銅劍、銅矛、銅戈、玻璃壁、ガラス勾玉、管玉等、多量の副葬品が出土した須玖・岡本の王墓を中心とした墳墓群、その周辺には須玖永田遺跡や須玖五反田遺跡をはじめとする青銅器やガラス工房跡が検出されている。さらに青銅器の括埋納も周辺で行われ、弥生中期の中心的な役割とともに強大な権力が推される。那珂、比恵遺跡群においても、青銅製錬先、銅鐵等の青銅器類や銅戈鋒型、取瓶、中子等の鑄造関係の遺物や墳丘墓、環塁が発見され、拠点集落として中心的な役割を果していたものと思われる。

上記の遺跡は低平な丘陵部に位置しているが、沖積地の福岡空港内に在す雀居遺跡では高度な土木技術をもって湿润な土地に夜白期から集落が形成されていた可能性があり、後期には環塁集落が営まれている。今後、調査が進みつつある井尻遺跡群のような中位段丘面の丘陵部の他に沖積地においても各拠点集落が発見されるであろう。

東を限る月隈丘陵には西側の平野部を臨む独立丘陵状の尾根線上に多く豪館墓群や貯藏穴群

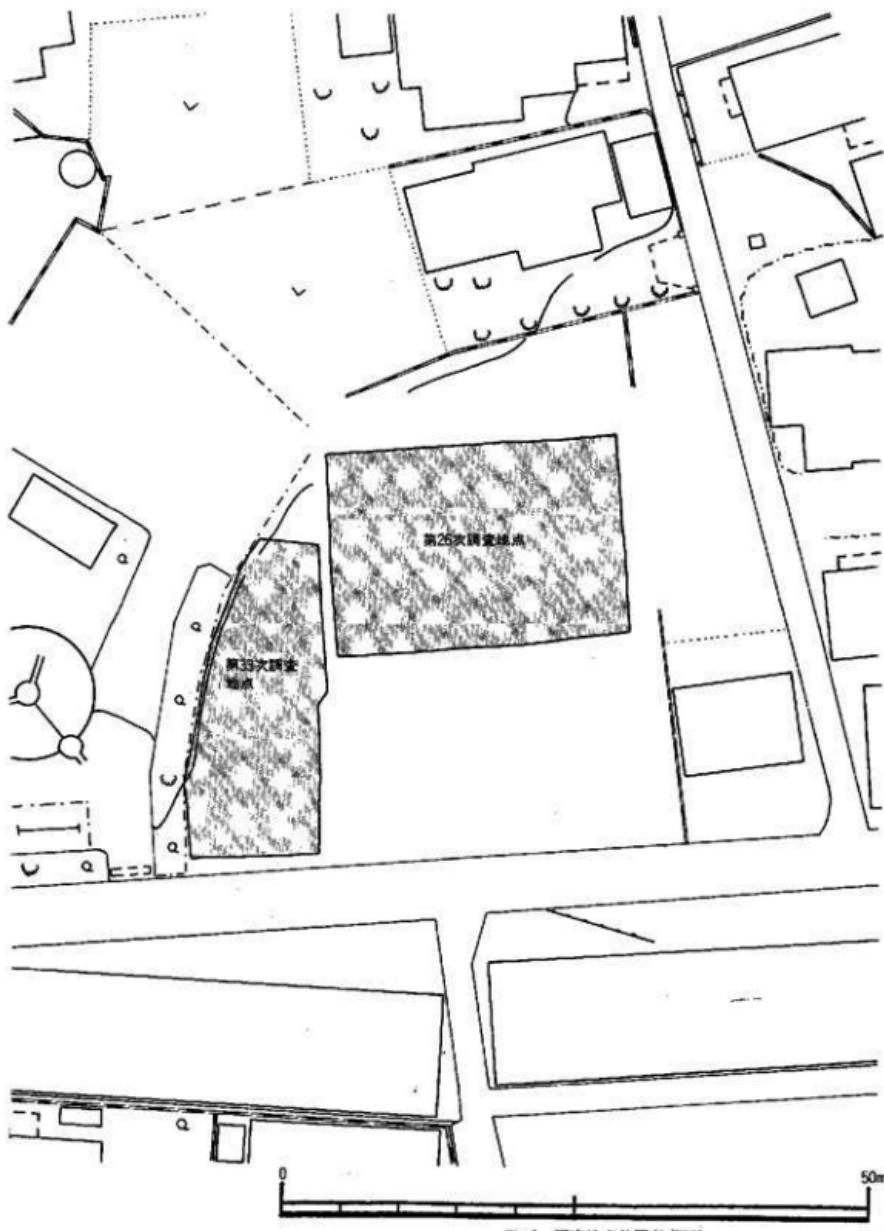


Fig.4 調査地点位置(1/500)

が形成されている。青木遺跡や金隈遺跡は大規模な調査により丘陵全体の墳墓群が露呈した。影ヶ浦遺跡では古墳の調査とともに前期末～後期初の貯蔵穴56基が検出された。遺物に関しては宝満尾遺跡の土壙墓から出土した内行花文明光鏡、大谷遺跡の青銅製鋤先、前漢鏡、赤穗ノ浦遺跡から出土した銅鐸鉄型等の青銅器類もみられる。

奈良時代においては井相IIIC遺跡、大野城の仲島遺跡で墨書土器や人面墨書土器が出土し官衙の施設が想定される。席田郡久爾駅付近に想定する見方もある。8世紀中頃創建の高畠庵寺、7世紀末頃創建の三宅庵寺が既往の調査で判明している。井尻遺跡群においても瓦の出土が知られている。

(3)比恵、那珂遺跡群

比恵、那珂両遺跡群は地形的には一帯のもので、便宜上、名称を変えているにすぎない。宅地化が進み全体的に削平を受けているが、主に弥生時代から中世までの遺構が密度濃く切り合って重複している。既述の那珂第37次で検出された夜白期の2重環壕を含め弥生前期の遺構は開拓を受けた丘陵縁辺部で検出されている。中期になると集落が拡大し、比恵第6次、16次、那珂第21次で方形墳丘墓が築かれ、中期末には環壕が掘削される。

古代においては比恵第7次、8次、13次、39次で楊列と倉庫群が整然とした配列のもとに検出された。6世紀後半以降の時期が与えられ、「那津官家」との関連で注目される。那珂では第18次で倉庫群、23次で倉庫群と溝が真北を基準にしたような配列で検出された。那珂遺跡ではこの他、南北や東西に走行する溝、神ノ前堀、月の浦塼の初期瓦から百濟系の連弁の瓦当までの瓦片等が既往の調査で知られ、将来その全容が明らかになるのが期待される。

本調査地点は那珂遺跡群南西部に位置する。旧地形図から周辺より一段高く、南西へ下降していく位置にある事が読み取れる。那珂20次、23次で検出された弥生中期末の環壕は北側約30mを東西に走行する。

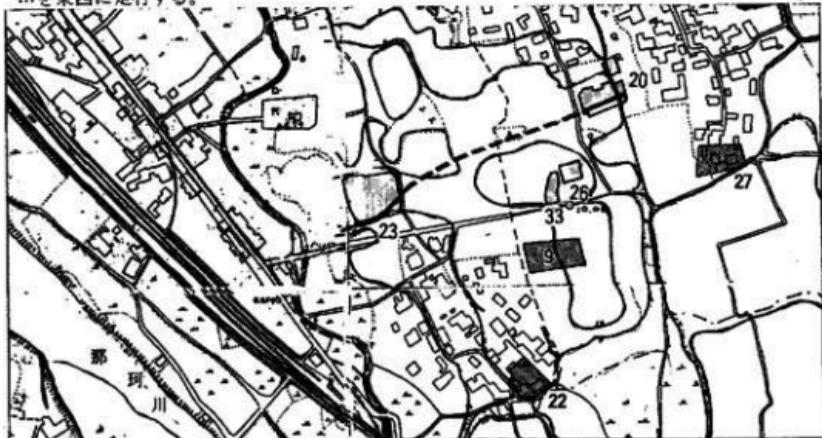


Fig.5 那珂遺跡調査地点位置図(約1/5000)

破線は環濠推定ライン

III 調査の記録

1 調査の方法

周囲に約50cmの引けをとり、バックホーによって表土剥ぎを行なった。表土は以前の重機による整地のため、人力では掘れない程固くしまっていた。最北部はフェンスと既存建物（第26次調査地点）によって観角に曲がり、表土剥ぎが困難で調査範囲から除外した。調査面積275m²を測る。

遺構は通し番号をネーミングし、更に遺構の種類によって、S C（住居跡）S B（掘立柱建物跡）、S E（井戸）、S K（土壤）、S X（性格不明）、S P（柱穴）を付した。図面、写真、出土遺物等の資料はこれに従う。

遺構実測は調査範囲の中心に主軸を設定し、2mグリッドを組んで行なった。従って、第26次調査の主軸と方向を異にするが、トラバース測量により組合せ、図面を作成した。（Fig. 3 遺構配置図）

2 層序

現状は整地され、平坦な宅地である。周辺は宅地化が進行し、丘陵地形の起伏が読み取りがたいが、緩やかに南西へ下降していくのが判る。

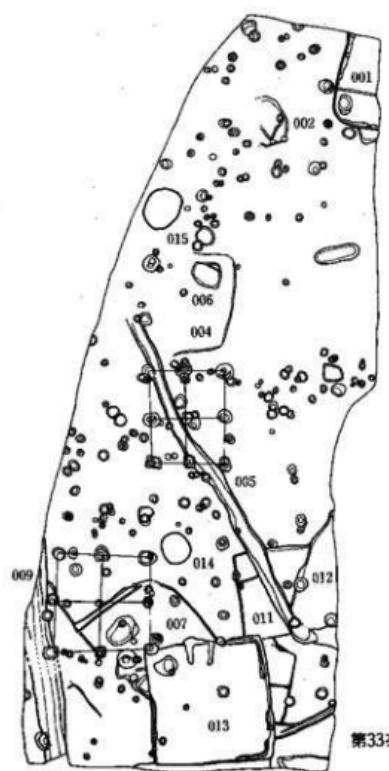
畑の耕作土を含む表土の明褐色土下（G L-20cm）に赤褐色粘質土（鳥栖ローム）の地山が堆積する。包含層の堆積はみられず、削平されている。地山の標高は北側で11.07m、南側で10.87mを割りわざかに傾斜している。

3 調査の概要

第33次調査地点は第20次と第23次調査で検出された弥生中期末の環壕推定ラインからは約30m南側に位置する。

検出された遺構は竪穴住居跡6棟、井戸2基、掘立柱建物跡2棟、溝2条である。竪穴住居跡は弥生時代後期と古墳時代後期の大きく2時期のものが混在する。井戸は弥生時代後期と奈良時代の所産である。出土遺物の総量はコンテナ20箱分。

地形が下降し削平が少ない南側に遺構は密度濃く分布している。特に古墳時代後期の竪穴住居跡は北側には無く、南側で多く切り合う。



第33次調查

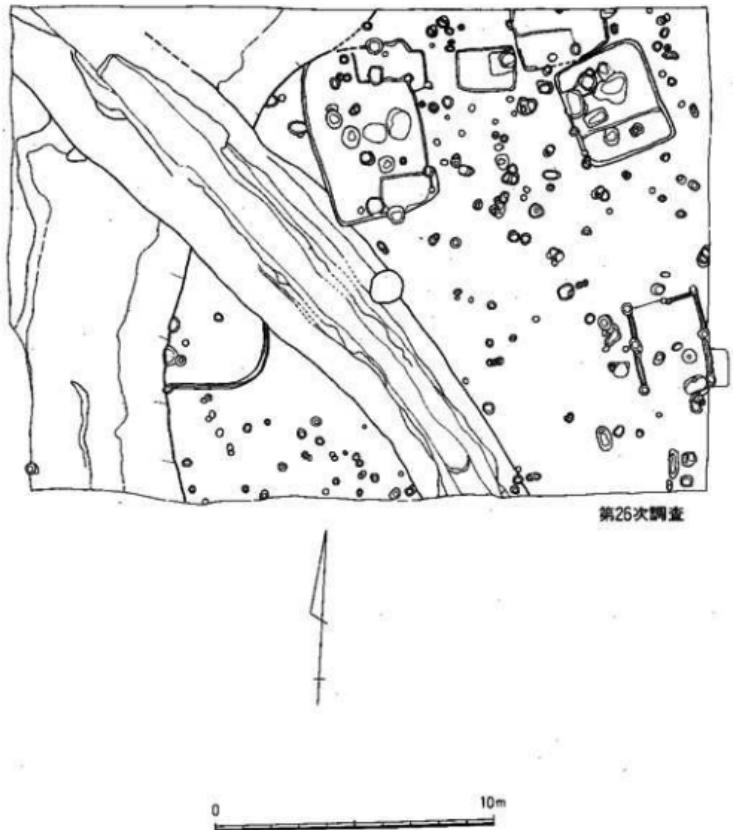


Fig.6 遺構配置図(1/200)

4 遺構と遺物

(1) 積穴住居跡

001 (S C)

調査区の北壁で検出された。大半が調査区外のためプランは不明瞭である。壁高28cmを測り、壁溝が断続的に巡り、小穴が2箇所にみられた。壁溝は幅10cm、深さは西壁側で8cm、南壁側では3cmと浅い。南側のベッドは北壁下端から115cmの幅で7cmの段差を有す。壁際のベッドの段落ちから鉄鏃と手捏ねの鉢が出土。

遺物

1は菱形の鉄鏃で床面から出土。銹着が著しく原形を見極め難いが、鏃身長5.4cm、最大幅2.2cmを測る。2の手捏ねの鉢は完形で床面から出土。器厚が厚く、内外の指頭痕が顕著に残る。3は埋土中から出土。内外の調整は不明で、小片の為復元径に誤差がある。

001 (S C)

調査区の南側で検出された。中央を005 (S D) に切られ、東壁側を012 (S C) に南西部を013 (S C) に切られる。南壁は残りが悪く、床面の汚れが判る程度で、そのプランは不確定である。北壁側で壁高8cm；壁溝は無い。壁下端から90cmの幅で3cmの段差を有したベッドの一部が検出された。炉跡は005 (S D) に壊された為か検出されず、主柱穴の可能性があるP₁、P₂の深さは各10cm、23cmを測る。

遺物

出土遺物は少量細片のため、図示できるのは4のみである。4は埋土中から出土。口唇部が

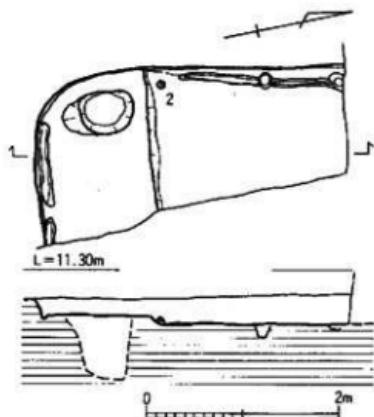


Fig.7 001 (S C) 実測図(1/60)

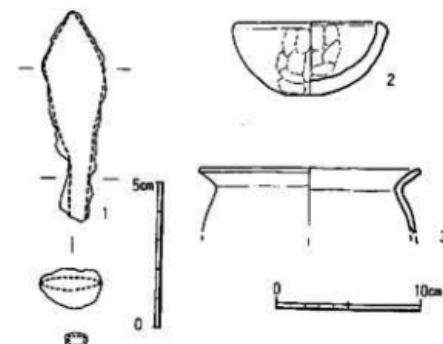


Fig.8 001 (S C) 出土遺物実測図(1/4)

やや肥厚し、外面のハケ目はナデ消された為か不明瞭である。細片の為、口徑に誤差がある。

012 (S C)

調査区の南東壁際で011 (S C) を切って検出された。東側の大半は調査範囲外のためプランはつかめず、南壁は005 (S D) に切られ、柱穴とも切り合ひ不整形な落ちとなっている。壁高は良好な部分で11cm、壁溝は検出されない。主柱穴の可能性があるP₂の深さは47cmを測る。

007 (S C)

調査区両側で検出された。西側を010 (S C) に南側を013 (S C) に切られる。西壁は不明瞭であるが北辺長4.95mの方形プランが推定される。壁高約10cm、北壁下端から離れて幅5cm、深さ2cmの壁溝が検出されたが、他辺には巡らない。主柱穴はP₁、P₂を考えられ、P₃、P₄は不確定である。一応2本柱と考えておく。各深さはP₁が68cm、P₂が35cm、P₃が7cmを測り、P₄は013 (S C) の貼り床土を除去して検出された深みで13cm程である。住居跡中央部の不整形の窪みは貼り床土の汚れを掘った事による。

遺物

5は検出時に出土。袋状口縁の外面の稜線は弱い。6は埋土中から出土。弥生中期の甕底部である。7は埋土中から出土。胴部は張らず、直からやや内傾して下がる小型の甕である。火熱

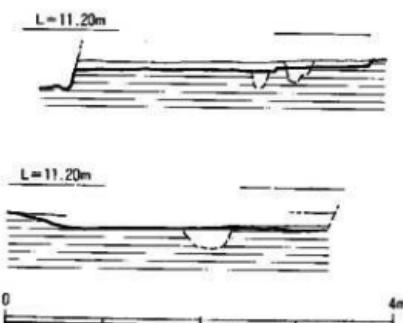
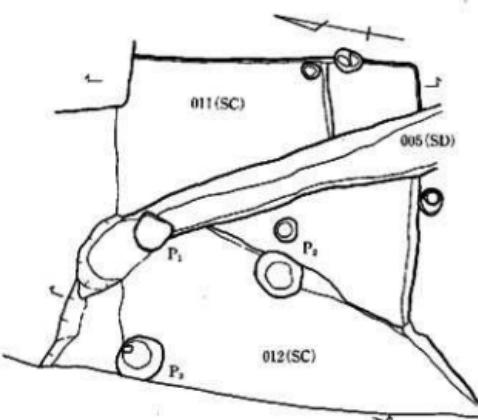


Fig.9 011, 012 (S C) 実測図(1/60)

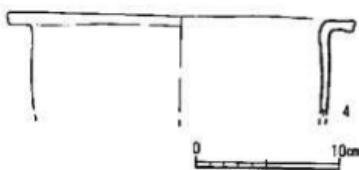


Fig.10 011 (S C) 出土遺物実測図(1/4)

を受け、器面が荒れているが、内面ナデ調整を施す。

013 (S C)

調査区南際で検出され、今調査で最も良好な遺存である。主軸をほぼ北に向け、北側は007 (S C) を切り、南側も住居跡と切り合っている。北辺4.14m、東辺4.30m、南辺4.15m、西辺4.00mを測る正方形に近いプランである。壁高は北側で22cm、南側で10cmを測る。壁溝は貼り床土との判別が難しい為か、不明瞭に断続的にみられる。北辺の中央部に灰白色粘土で構築されたカマドが設置されている。カマドの中心線に沿って、住居内に2箇所、灰白色粘土の塊が検出された。南壁近くのものは「対面粘土」と呼ばれる那珂遺跡群においても事例報告されているものと同様の形態を有すると考えられる。中央近くの粘土塊については性格は不明。主柱穴は貼り床土との識別が困難のためか床面では検出できなかった。貼り床土を除去し、地山掘削の形状は中央とくに粘土塊付近が高く周囲に低くなる。対面粘土近くに不整形の掘こみがみられる。なお、貼り床上を除去した段

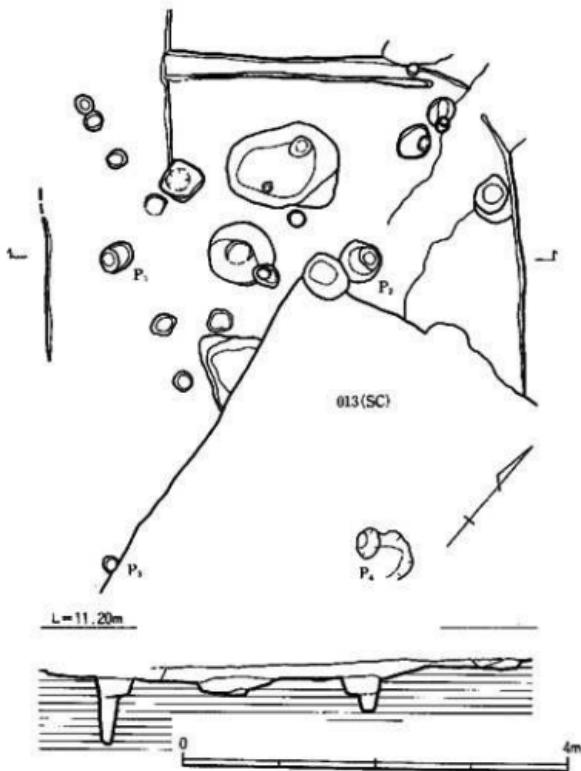


Fig.11 007 (S C) 実測図(1/60)

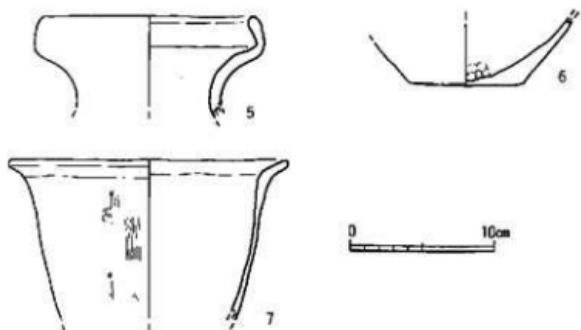


Fig.12 007 (S C) 出土遺物実測図(1/4)

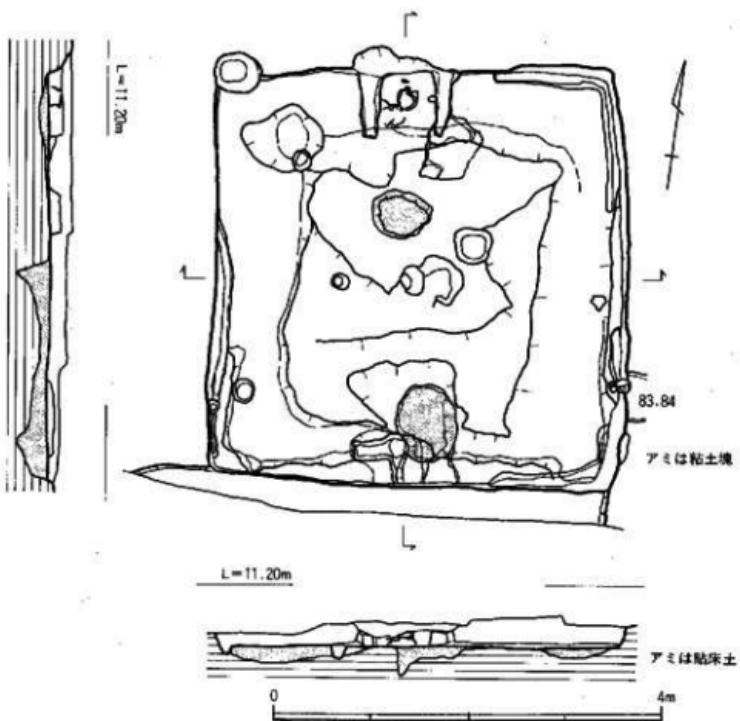


Fig.13 013 (S C) 実測図(1/60)

階でも主柱穴は確認できなかった。

カマド

北辺中央で検出された。焚口幅60cm、焼成部の奥行63cmを測る。住居外へ張りだすスロープが認められ、粘土が部分的に貼りつく。煙道部を構築していたものであろう。カマド本体は灰白色粘土で構築されている。袖部は幅15cm、高さ12~16cmを有する。右袖前面に崩壊したカマド本体の粘土が流出した状態で堆積する。土層断面からカマド本体は貼り床土の上に構築され、焼成部の基底も、上面から浅皿状に窪むのが判る。袖部に焼土を含む暗褐色土が貼りつき、補修に使われた可能性がある。焼成部中央に窓の上半部が正置に粘土で固定されている。

遺物

8~10は須恵器、他は土師器である。8は007 (S C) と切り合った位置の埋土中から出土。

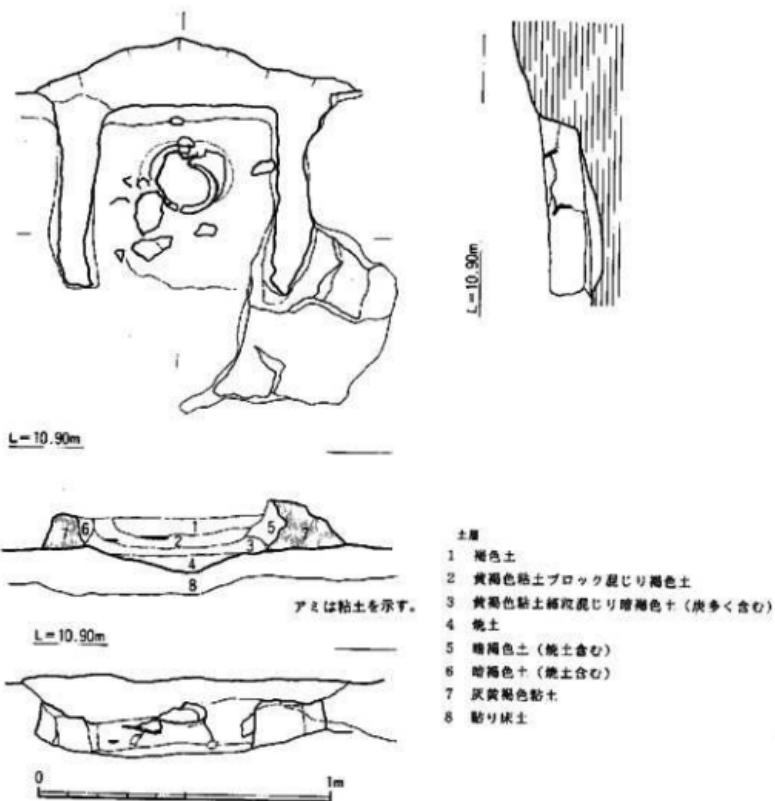


Fig.14 013(S C)カマド実測図(1/20)

蓋の口縁部であろう。直に近く折れ曲がり、端部は丸く収める。他と時期差があり混入したものか。9は埋土下部から出土。無蓋高壺の壊部で、外面に4本の沈線が施される。口縁先端にかけて細まり端部はシャープな稜を有した面をもつ。10は東壁際の床面直上から出土。瓶の胴部と考えられるが提瓶では湾曲が大き過ぎるように思える。一部焼き歪みがある。胴部中央が円形に接合面から欠損している。閉塞部分が剥落したものか。外面の2本の凹線を境に外面木目直交平行タキ、内面同心円の当具の痕が残る。内面ヨコナデの起伏が著しい。焼成堅緻。11は埋土中から出土。体部中位で屈曲し、外反しながら口縁に延びる。内面口縁端部近くをヨコナデにより内湾させる。器面があれ、調整が不明瞭であるが、内外ナデないしヨコナデによ

るものか。淡明黄褐色を呈す。12は埋上上位から出土。11と同様の器形をなすが、底部中央へ外反ぎみに下がり、肥厚していく。高坏の可能性がある。調整不明、赤褐色を呈す。13は埋土中から出土。脚柱外面はヘラナデによる縱方向の面取り状の痕跡がみられる。内面はヨコナデか。14は埋土下位から出土。体部中位で屈曲し、内湾して口縁に立ち上がる。口縁端部は内面からのヨコナデにより内湾し尖る。15は埋土下位から出土。カマドの底破片である。内面に粗いナデの痕が残る。16は埋上下位から出土。小形の甕で、短い口縁が「く」の字屈曲し、胴部はほとんど張らない。内面胴部へラケズリ、口縁の屈曲部近くにナデ押さえの指頭痕が残る。外面は火熱を受け、器面があれ調整不明。17は弥生後期の甕で混入したものである。14はカマド焼成部から出土したもので、この住居跡の時期を決めるものである。完形に復元でき、口径20.0cm、器高29.0cmを測る。胴部の最大径が下位に在り底部は平坦に近い。器面が剥落している為、調整は不明瞭であるが、外面タテハケを比較的のこし、部分的にナデ消されている。内面胴部は縱方向のヘラケズリ、下位から底部にかけてナデ調整を施す。淡赤褐色を呈し、内外面に煤が付着する。

016 (S C)

調査区南側で013 (S C) に切られて検出された。遺存はきわめて悪く、壁高3~5cmで、北辺下端から120cmの幅で5cmの段差を有すべッドが検出された。炉、主柱穴等は見いだせない。南側に別の住居跡の壁溝と考えられる幅17cm、深さ5cmの溝が検出された。

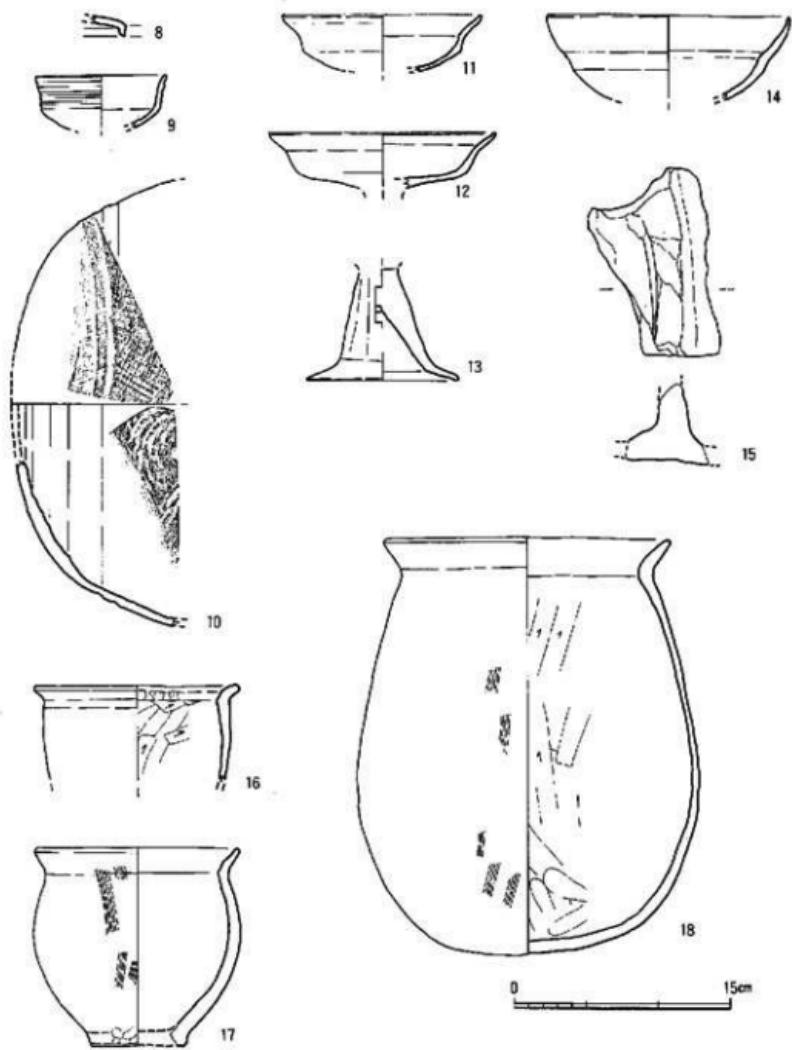


Fig.15 013(S C)出土遺物実測図(1/4)

(2) 挖立柱建物跡

017 (S B)

調査区中央部で検出された。2×2間の純柱建物である。主軸はほぼ磁北を向く。柱穴は方形に近いプランで、各柱間は整然と均等な距離が置かれる。南北（桁行）334cm、東西（梁行）267cmを測る。深さは30~50cm遺存し、間柱のP₂、P₄、P₆が浅い。005 (SD) が斜交し、P₁、P₃と切り合う。埋土が非常に類似するため判断が困難であったが、柱穴が切るものと思われた。柱穴からの出土遺物は土師器の網片が少量で明確な時期は決めがたいが、周辺の状況から奈良時代か。時期については後述する。

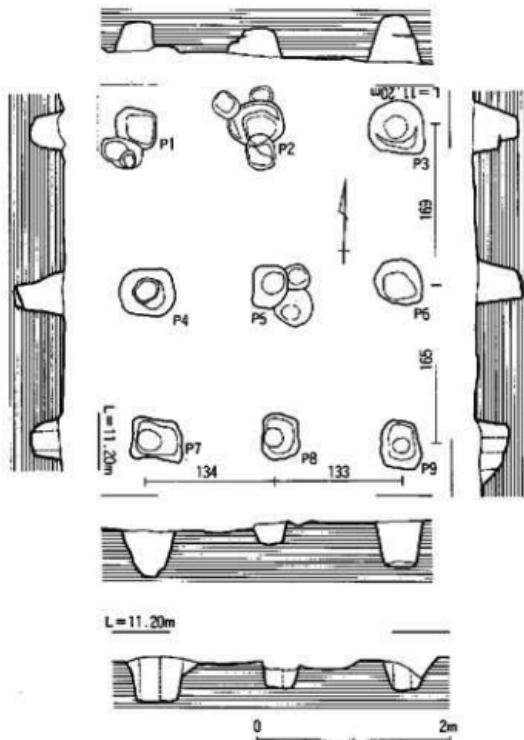


Fig.16 017 (S B) 実測図(1/50)

018 (S B)

調査区の南側で検出された。 2×2 間の純柱建物跡で、P₁～P₃柱間335cm、P₄～P₆柱間350cmを測る。南側の柱筋は歪み、中央の間柱P₅も柱筋からずれる。主軸は017 (S B) と同様真北に近い。柱穴掘り方は方形に近いプランで、深さがP₆が浅い他は30～40cm遺存する。柱筋に歪みがある為、柱間の距離にはらつきがみられるが、およそ160～170cmにおさまる。

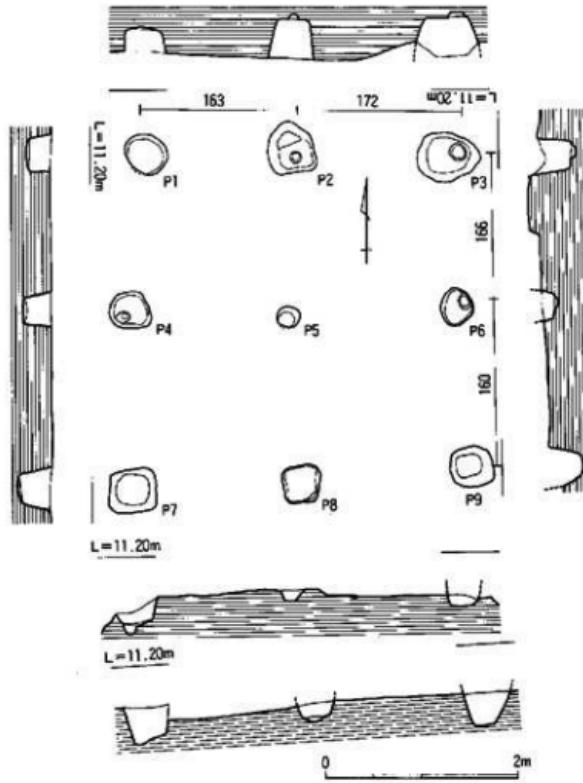


Fig.17 018 (S B) 実測図(1/60)

(3) 井戸

014 (S E)

調査区中央付近で検出された。検出面でのプランは長径114cm、短径105cmのわずかに梢円形をなす。掘り方は地山が赤褐色の鳥居ロームまでは直に近く、下層の黄褐色土から灰白色の八女粘土では崩落のためかオーバーハングしている。さらに下層の青灰砂からは基底部へすばまっていく。最下の下端は径60cmの円形を呈す。最下までの深さは5.10mを測る。遺物は八女粘土と青灰砂のレベルでまとまって出土した。湧水地点での祭祀が行なわれたものと思われる。

遺物

(上層出土)

19~29は遺物が集中して出土した検出面下-215cmより上位から出土した土器である。

19は高杯と考えられ口縁部下に断面三角形の突帯を巡らす。遺存する内外面は丹塗りである。20は胴部が内湾していく角度から鉢形土器と考えられる。口縁部は「く」の字に近くなる。胴部のハケ目は器面が剥落している為、残りが悪い。21の甕は口唇部を肥厚させ、凹線上に端部を窿ませる。胴部外面には粗いハケ目を施す。22は逆「L」字口縁、胴部に張りをみせる。外面のハケ目は器面が粗れている為残りが悪い。23は鋲先口縁をなし、口唇部に刻みを施す。胴部にやや張り出し、口縁部下と胴部最大径下に「M」字突帯を巡らす。丹塗りは外面にのみ認められる。24は壺底部で外面縦方向のミガキが不明瞭ながら見える。内面は放射状に板状小口による成形の痕が残る。外面丹塗り。25は底部中央に穿孔した甕底部である。26も甕底部で外面のハケ目は器面剥落して残りが悪い。27は外面に5本/cmの粗いハケ目を明瞭に残す。図示部分は完形で、底径10.0cmを測る。28、29の甕底部は外面に本来縦方向のハケ目を明瞭に残す。28のハケ目は細かい摩耗したものである。

(-215cm地点)

30~43は地山が八女粘土になって集中して出土した土器群である。

30は完形の蓋である。口径22.0cm、器高5.4cmを測る。径

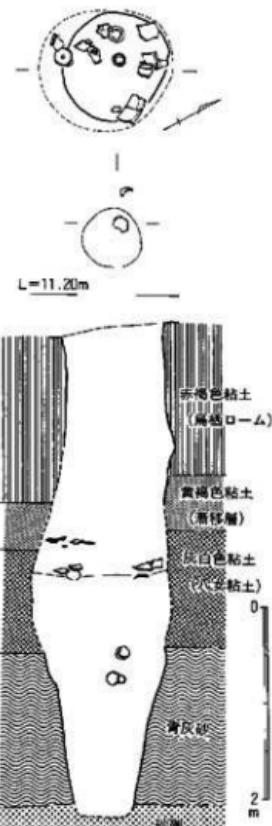


Fig.18 014 (S E) 実測図(1/60)

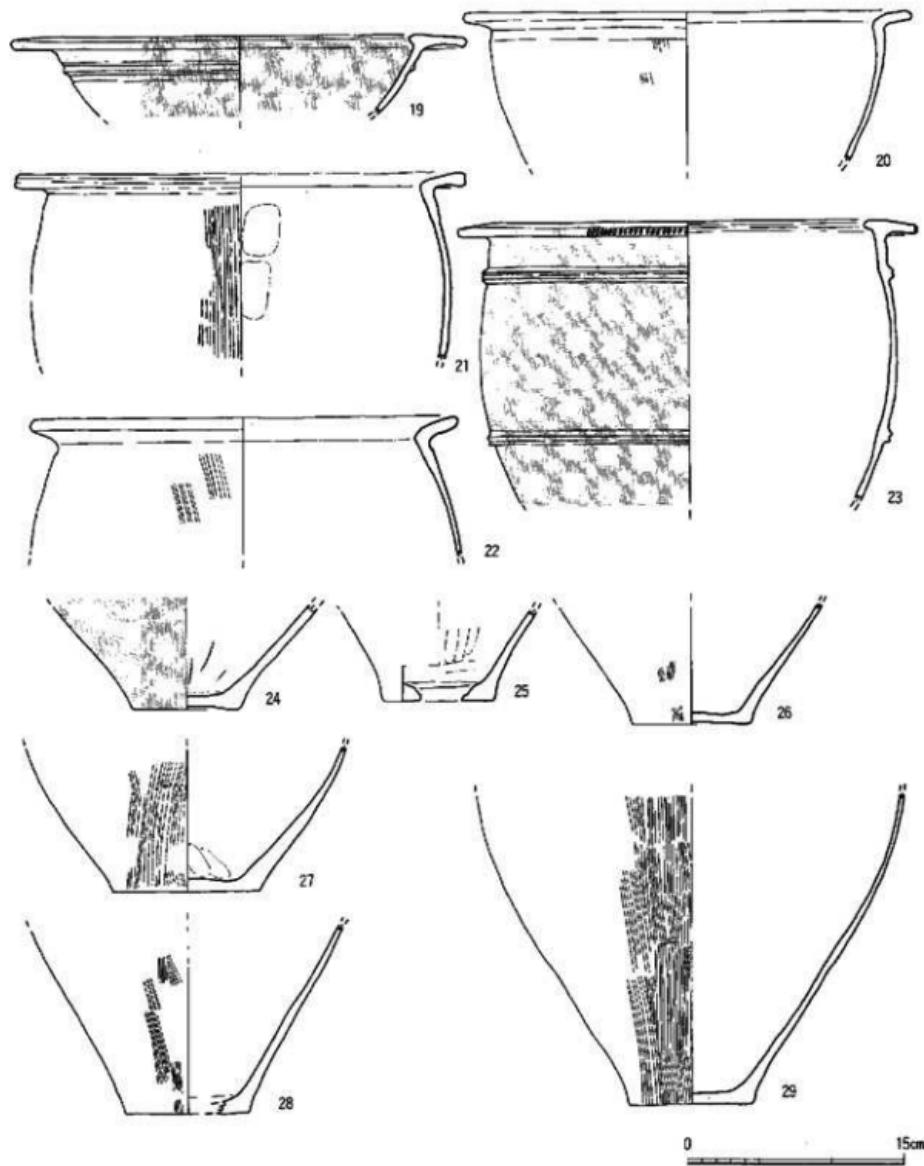


Fig.19 014(S.E)出土遺物実測図 1 (1/4)

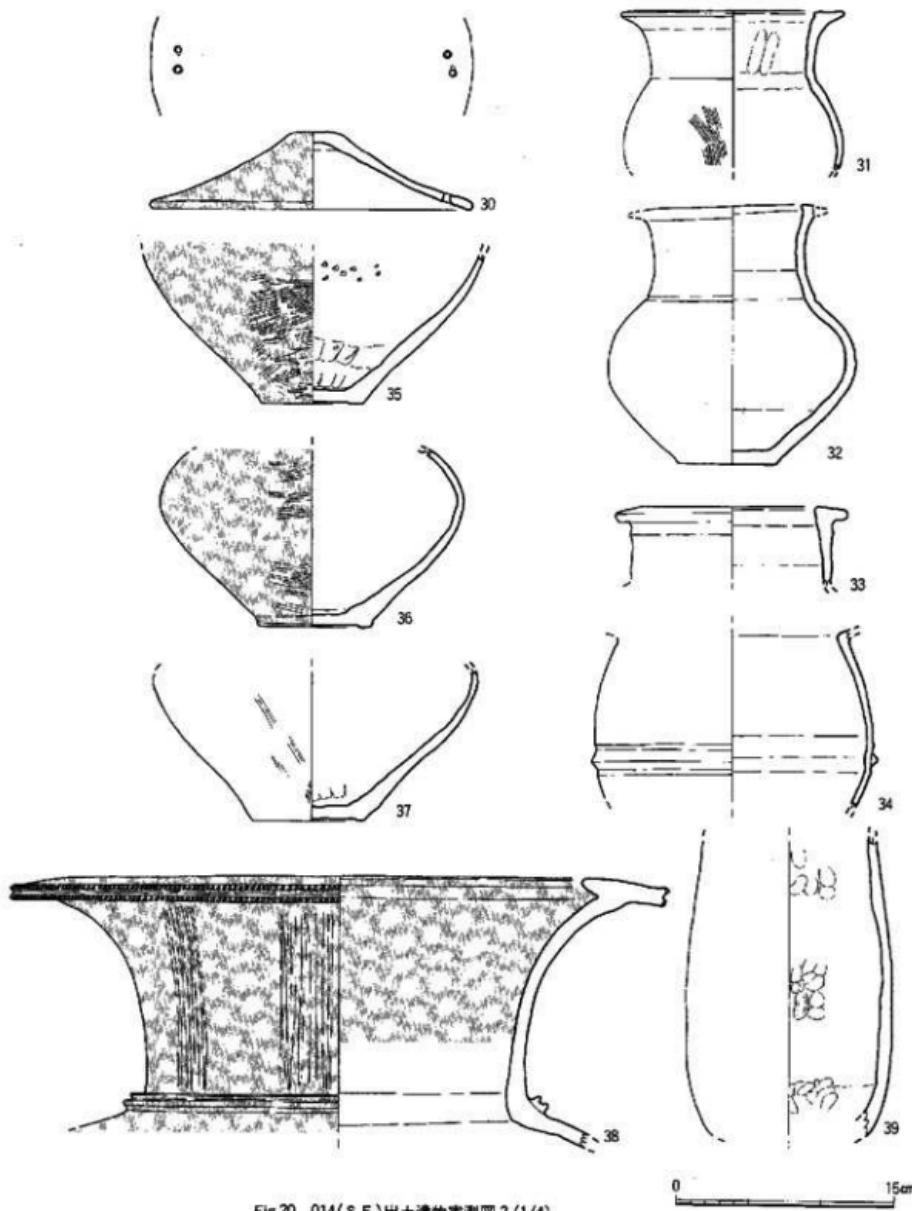


Fig.20 014(S E)出土遺物実測図 2 (1/4)

0 15cm

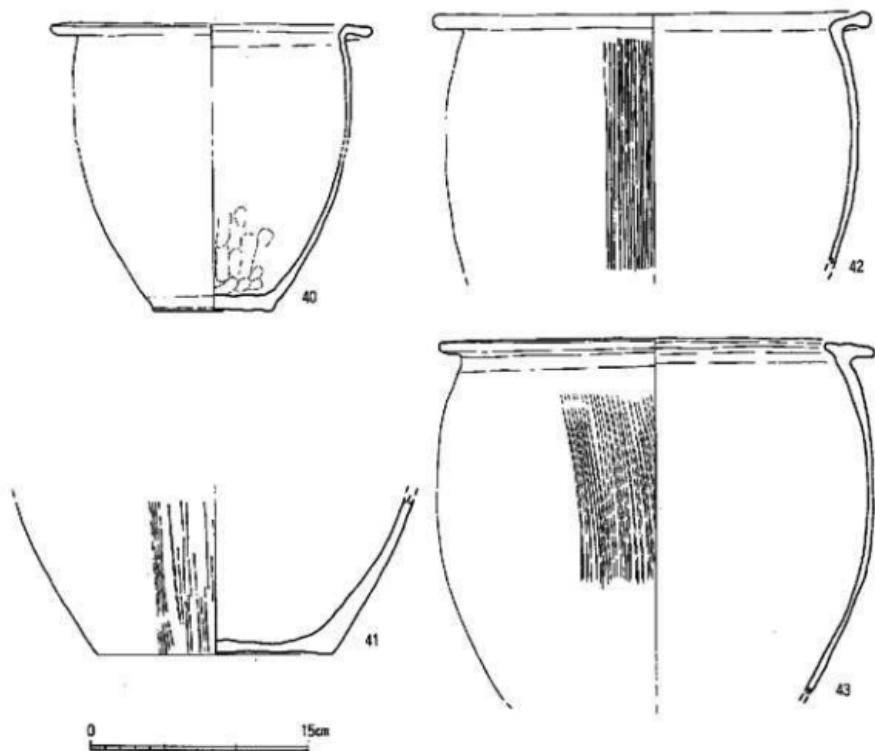


Fig.21 014(S E)出土遺物実測図3(1/4)

3.5cmの平坦に近い面をなす天井からやや外反して口縁に延びる。対置して4箇所に穿孔を有す。内外の器面が剥落しているため調整は不明瞭であるが、外面ミガキを施し、丹塗りされる。黒斑が1箇所認められる。31は小形の壺で口径15.3cmに復元できる。口縁は逆「L」字状に外へのび、断面三角形に近い。32も31と同様の器形をとる小形壺である。復元口径14.0cm、器高18.0cmを測る。外面丹塗りと思われるが器面が剥落している。33は口径16.0cm測る小形壺である。頸部は直に近く立ち上がる。外面横方向のナデ、内面ナデを施す。34は小形の甕と推される。口縁は「く」の字に折れ、胴部は球形に張りだす。最大径部に断面三角形の突帯を巡らす。外面のハケ目はナデ消されている。35は壺底部である。外面横方向のミガキ、内面ナデを施されているが、底部付近にハケ原体の小口による横方向への成形の痕が残り、胴部に爪状のひっかけた様な痕跡がみられる。36の底部は段を有し、わずかに上げ底となる。外面横方向のミガ

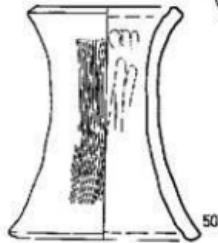
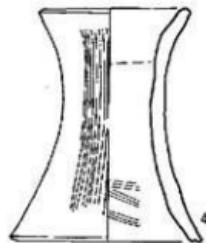
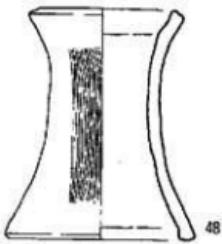
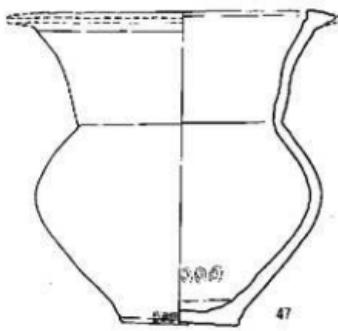
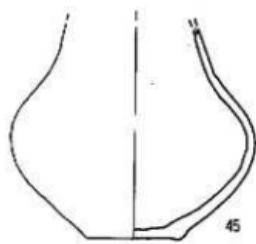
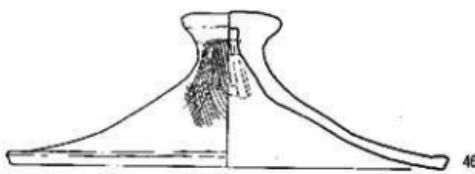
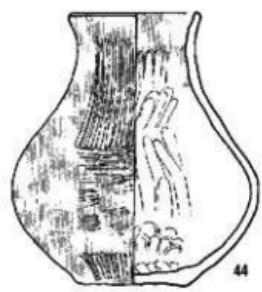


Fig.22 014(S E)出土遺物実測図 4 (1/4)

きが施される。37は外面タテハケ後ナデをほどこす。内面底部付近に板状の小口による成形の痕がみられる。38は丹塗りの大型壺である。鉢先口縁の口唇部に凹線を巡らし、刻みを施す。頸部から胴部への屈曲部分に「M」字突帯が貼り付けられる。頸部外面に8箇所、約3.5cmの幅で帶状の暗文がみられる。39はやや上位から出土した異形の土器である。底部は丸底と思われる湾曲を示し、胴部は細長くわずかに内傾しながら立ち上がる。外面ミガキが施され、上位は横方向に認められる。内面はナデ調整で部分的に指頭痕が明瞭に残る。色は淡明黄褐色を呈し、外面に長い黒斑が認められる。胎土は極めて緻密。40は復元口径22.0cmを測り、鉢形に近い器形をなす。口縁部は逆「L」字に折れ曲がり、胴部はやや張りだす。不明瞭であるが、ハケ目はナデ消されている可能性がある。41は平底から内湾ぎみに胴部へ立ち上がる。42の甕は逆「L」字の口縁を有し、口唇部が肥厚し、胴部がやや張る。43は口径30.2cmを測り、鉢先状の口縁部上面は水平ないしやや外へド下がる。胴部はやや外側へ張り出し、外面に粗いタテハケが施される。

(-215~-370cm地点)

-215cmで集中して出土した地点以下、埋土の黄褐色土を掘り下げて出土した遺物であるが、とくに地山が青灰砂に-340cm以下から完形の44、48~50が出土した。

44は完形の丹塗り壺である。口径9.2cm、器高19.0cm、底径7.6cm、胴部最大径17.0cmを測る。内外面の口縁部付近はヨコナデ、外面頸部から胴部上位まで暗文が施される。以下、胴部下位まで横方向のミガキ、底部付近を縱方向に磨く。内面は頸部から胴部下位までは綻ないし斜め方向に滑る様にナデ、底部付近は押さえるような指頭痕が残る。45も44と同様の器形をなすが、器面剥落して調整不明。46は口径30.3cm、器高10.7cmを測る。体部はやや外反して口縁にのび、端部は平坦面をなす。外面に粗いタテハケを施すが、掘付近はナデ消されている。47は口唇部を欠損する他は完形に近い。復元口径23.0cm、器高22.0cmを測る。頸部がやや湾曲して外方へ広がる。頸部に縱方向のナデ、胴部上位に横方向のナデ、下位に縱方向のナデを加えハケ目は消されている。胴部最大径以下に黒斑が認められる。48~50は同レベルから出土し、ほぼ完形品である。口径10.5cm、器高16.2cm、底径13.0cmのほぼ同規格である。外面にタテハケを残すが、口縁と下端付近はヨコナデにより消されている。51は口径21.0cm、器高22.9cmを測る。口縁は逆「L」字に折れ、胴部はわずかに張りだす。胴部中央に窓を穿孔する。外面に粗いタテハケを明瞭に残す。口縁から胴部上位までの内外面がヨコナデを施す。

015 (S E)

調査区の北西際で検出された。検出面でのプランは長径1.6m、短径1.3mの橢円形を呈す。断面形は台形をなし、基底部に向かってほぼ直線的に掘られている。底は45~50cmの円形をなし、須恵器壺の完形品61が正置の状態で据えられていた。ボーリング棒を下底から刺すと約60cm下で硬度が変わるのが認められた。地山が砂に変わるものか。検出面から2.6m下で土師器の甕が埋置され、湧水点での祭祠が行なわれた可能性がある。

遺物

純量にしてコンテナ1箱分が出土した。その中には小片のため図示を割愛したが、移動式カマド片や圓面布目の丸瓦1点含む。

52~54、60、61は須恵器、他は土師器である。51は土師器壺の壺部か。埋土中位~下位にかけての地点から出土。52は無高台の壺身で、埋土中位から出土。復元口径13.0cm、器高3.8cmを測る。53は完形に近い。口径13.6cm、器高4.4cmを測る。底部と体部の境は不明瞭で、体部は直線的に外方へのびる。54は埋土中位から出土した壺蓋である。約1/2が遺存し、口径17.2cm、器高1.6cmを測る。口縁端部は短く下方に折れ、断面三角形に近い形状を呈する。55は埋土下位から出土。丸底の底部から体部はやや湾曲して延び、肥厚して外方へ開く口縁にとりつく錐形の器形をなす。内外面の口縁部はヨコナデ、外面の体部上位は縦から斜め方向のハケ目、底部付近には横方向のハケ目が加わる。内面は体部上位がヘラケズリ、底部付近に指頭痕が残るナデを施す。復元口径29.4cm、器高12.0cmを測る。56は埋土下位から出土。復元口径24.0cm、胴部が張らない甕である。57は土師器甕が完形で出土した地点近くで約1/2が遺存して出土した。復元口径18.0cm、器高13.5cmを測る。胴部は張らず、外面のハケ目は良好に残る。58は埋土中~下位にかけてのレベルで出土。外面のハケ目は上位が縦方向、中位以下に横方向へ施す。59は埋土中位~下位にかけて出土。60は口縁の一部を欠損する他完形である。口径12.2cm、器高20.0cm、胴部最大径19.8cmを測る。口縁部は上へつまみあげる様にし頸部との境が張り出し明確な稜線を有す。胴部最大径部は上位であるが、明確な肩はもたない。内外面口縁部から胴部最大径部付近までヨコナデ、以下外面は木目直行の平行タタキ、内面青海波の当具

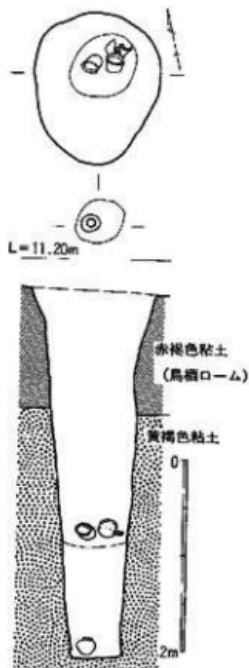


Fig.23 015 (S E) 実測図(1/60)

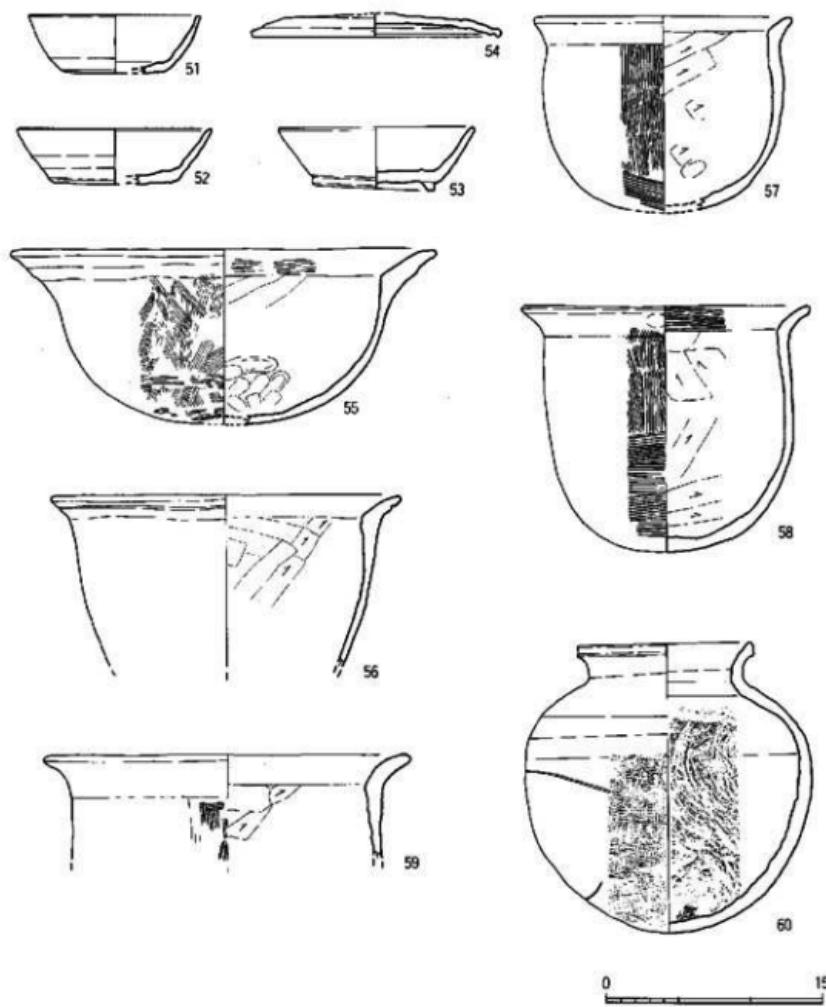


Fig.24 015(S E)出土遺物実測図 1 (1/4)

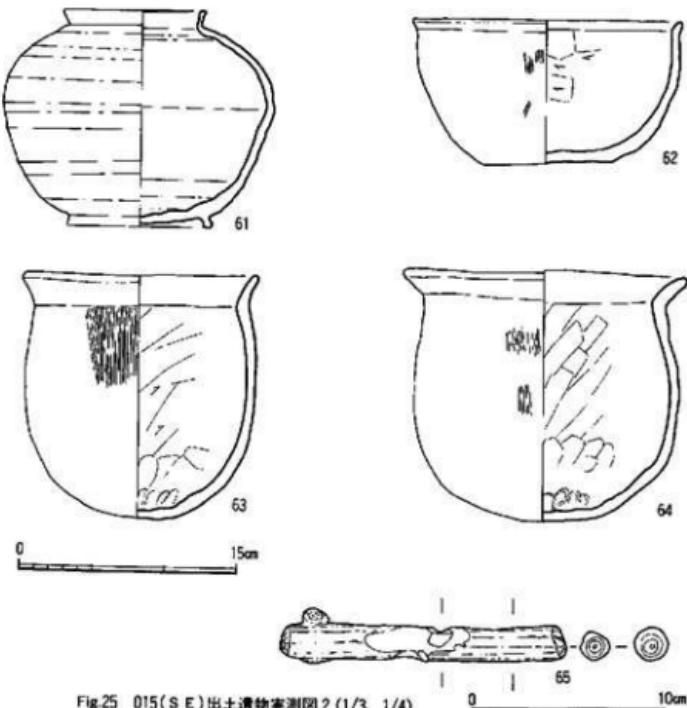


Fig.25 015(S E)出土遺物実測図2(1/3, 1/4)

痕が残る。胴部中位に断続した横線が2本、底部に斜めに沈線が1本ヘラ型状に刻まれている。61は最下底に正置していた。完形品である。口径9.8cm、器高15.0cmを測る。短い頸部が直線的に外反し口縁端部は平坦に近い。胴部最大径は中位に在り、以下、直線的に内傾していく。底部は湾曲の小さい丸底である。外面口縁部から胴部中位まではヨコナデ、下位は回転ヘラケズリ、底部はヨコナデを施す。内面ヨコナデ、底部付近は起伏が著しい。62は下底から出土。部分的に欠損するが、完形に近い。口径18.7cm、器高10.0cm、底径9.0cmを測る鉢形を呈す。口縁部は短く外反し、胴部は張らずにやや内済して平底の底部へのびる。外面は、不明瞭であるが、わずかにタテハケが残り大半ナデ消されているようである。底部には板状小口による擦痕がみられる。内面胴部はヘラケズリ後ナデを施す。63は検出面から-2.3mのレベルに埋置された甕で完形である。口径16.5~19.5cmでやや歪みがある。器高は16.7cmを測る。口縁部の外方への開きは小さく、底部は平坦に近い。64は63と併に埋置されていた。口径19.6cm、器高17.3cmを測る甕の完形である。65は61の壺内から出土した。全長14.8cmの棒状を呈す。両端を削り丸く面取る。樹皮、枝を残し、中央が抉り削られている。

(4) 土壌 (S K)

003 (S K)

調査区北東部で検出された。長軸長165cm、幅52cmを測る。両短辺は弧状であるが、西側はカーブがきつく、突出したプランを呈す。深さは20cmで若干中央が低い。基底部は平坦面をなす。出土遺物は土師器の細片が少量出土したのみで図示できない。

（5）性格不明土壌 (S X)

削平のため造構のプランが識別できないもの、掘り方に人為的な作為が不明確な不整形のものをこの類にいたれた。

002 (S X)

調査区北側で検出された。最も深い部分で検出面から3cmで、削平されている。北側は円形のプランは比較的原形を留めていると考えられるが、南側は不整形となり消滅している。

遺物

66～68は須恵器、他は土師器である。66は上面が平坦な壺蓋の撮みである。径1.7cm、高さ0.7cmを測る。67は壺身の高台部分である。底部と体部の境に高台がとりつき、体部へ立ち上がる。68は壺の耳状の把手である。69の壺は小片のため、復元口徑に誤差を生じる。70は把手がつく壺である。底部の縁部は屈出し肥厚させる。71はカマドの底部分である。

004 (S X)

調査区中央部で検出された。1辺が3.3m以上の方形プランの住居跡である可能性が高い。しかし削平が著しく、壁高は無く床面の汚れ程度の遺存のみプランは不正確である。

遺物

図示したものは全て須恵器である。72は高壺と思われる。口縁部は外方へ屈曲し上端は平坦に近い。73は壺蓋で、撮みの上部は中央をわずかに高く盛り上げる。撮み径1.9cm、高さ0.5cmを測る。74は壺身の口縁付近である。外面口縁部は「く」の字に外側へ折れ、端部は丸く收める。小片のため復元口徑に誤差がある。75の口縁部は直下に短く折れ、端部断面は半球状をなす。76は壺身体部である。

006 (S X)

調査区中央部の004 (S X) 内で検出された。不明瞭であるが、頃な方形プランに識別された。長軸長107cm、短軸長74cmを測る。北東部の隅角が張りだすが、深さ4cmの浅いテラス状になっている。中央に若干深くなり、最深で-10cmである。

遺物

76、77は須恵器の壺、78は石製の投擲である。

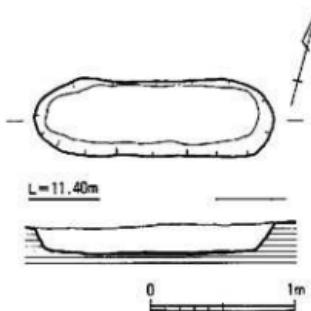


Fig. 26 003 (S K) 実測図(1/40)

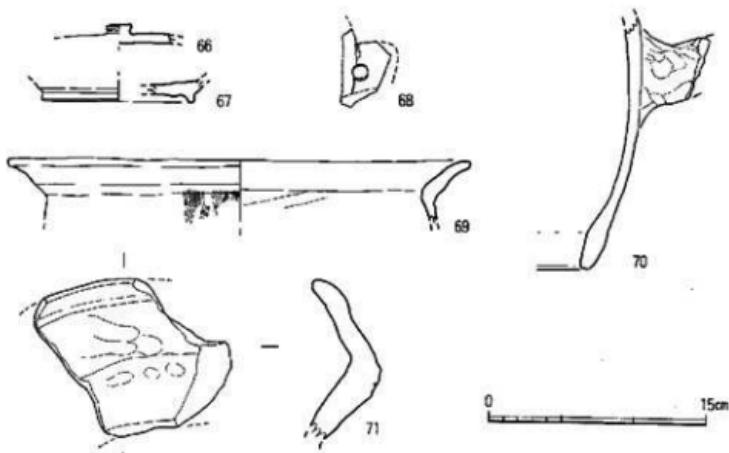


Fig.27 002(S X)出土遺物実測図(1/4)

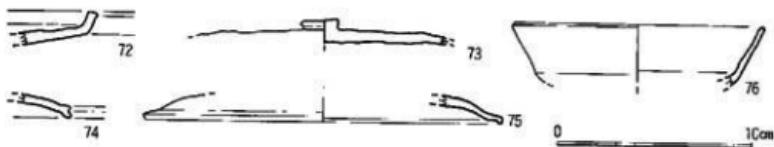


Fig.28 004(S X)出土遺物実測図(1/3)

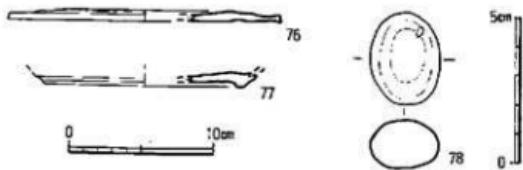


Fig.29 006(S X)出土遺物実測図(1/2, 1/4)

(6) 溝 (S D)

005 (S D)

調査区の中央部を北西から南東方向へ蛇行して走行する。北西端で検出面（標高10.87m）から深さ14cm、南西端は012 (S C) と切り合って識別が困難であったが東へ折れていく。基底部は中央が2cm程度、両下端より深くなる位の平坦面である。

遺物

細片が少量出土し、図示できるのは2点のみである。

79は胸部が球形に張りだす小形の壺である。外面に細かいハケ目が残り、内面ナデ調整である。80は須恵器の環身體部である。この時期（奈良時代）を明確に示す遺物は80のみである。

009 (S D)

調整区の南西際で検出された。短い範囲であるが、確認できた部分では真北から、やや西にふれて、直線的に走行する。検出面での上端幅85cm、下端幅28cmを測り、断面台形を呈す。出土遺物は土師器、須恵器の細片のみで図示できない。青磁の施小片が3点出土したが他に明確な中世を示す遺物はない。

(7) その他（柱穴、遺構検出時出土遺物）

81～84は013 (S C) 南西壁溝際で出土し楕は倒置し重なっていた。遺構が切り合っていたものと考えられるが、明確なプランは把めていない。81は復元口径11.2cm、器高1.7cmを測る。やや歪みが生じているが、外底部はわずかに丸みをもつ。内底部と体部の境、体部中位に屈曲を有す。82は口径10.8cm、器高1.7cmを測る。外底部が平坦である他は81と器形は同じである。81、82ともに器面があり、調整不明。83は黒色土器B類ではほぼ完形である。口径16.0cm、器高7.0cmを測る。外底部は丸底で、体部中位で屈曲し、直立ぎみに立ち上がる。口縁端部は外反する。内外面の調整不明。84は黒色土器A類である。口径15.6cm、器高6.6cmを測る。体部中位の屈曲は不明瞭で口縁端部はわずかに外反する。内外面の調整不明。

87、88は建物の復元はできなかったが柱穴からの出土である。

89は002 (S X) から出土した削器である。横長削片を利用する。深く大きな剥離が連続している。器表の風化が著しい。先土器時代の石器と考えられる。本調査区の南側に位置する第46次調査（1993年度調査）ではまとまって、当該時期の遺物が出土した。

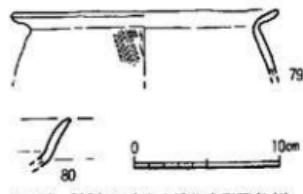


Fig.30 005 (S D)出土遺物実測図(1/4)

L=11.40m

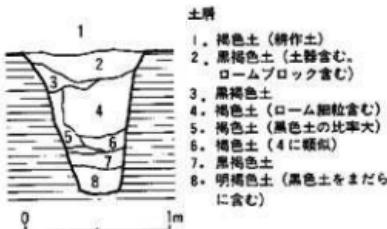


Fig.31 009 (S D)土層断面図(1/40)

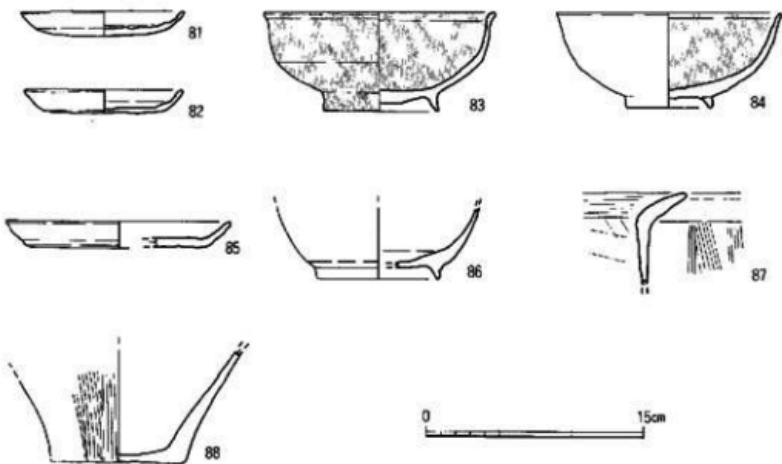


Fig.32 柱穴出土遺物実測図(1/4)

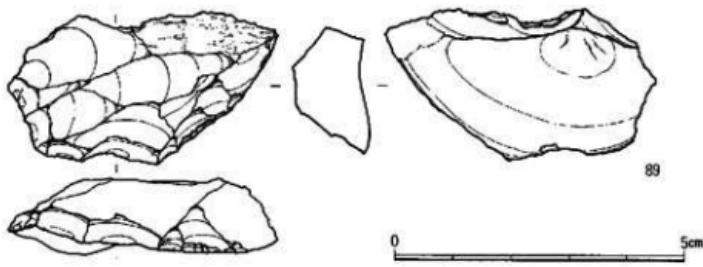


Fig.33 002(S X)出土石器実測図(1/1)

ま　と　め

遺構とその時期

竪穴住居跡

検出された竪穴住居跡 6 棟は 013 を除き、その遺存が悪い為詳細な時期が決めがたい。しかし、第26次調査成果もふまえて、概ね弥生時代中期末～後期と古墳時代後期の 2 時期が考えられる。

弥生時代の遺物は第26次調査の井戸、本調査の 014 (SE) 及び各遺構から弥生時代中期末から後期中頃に置けるものがみられる。該当する 001、011 はベッドの施設を有し、007 は 2 本柱の主柱穴が検出された。第20次、第23次（II 参照）で確認された中期末の環壕の延長が判らない現在（多重の可能性もある）、推測の域をでないが後期になり集落が南へ拡大したとも考えられる。後期の住居跡はさらに南の第41次調査でも検出された。

古墳時代後期の 013 はカマドを設置し対面する壁際に粘土塊が置かれ、下部に貼り床土で埋まつた掘り込みがみられる。甘木市立野遺跡で入り口施設の「対面粘土」として注目され、那珂遺跡群第 7 次調査でも確認されている。時期は長胴化した須恵器から 6 世紀後半以降が考えられ、調査区北側には当時期の住居跡はみられず、南側へ集中していく。遺物中の鉢や高环に 4 世紀後半から 5 世紀代のものを含み、該当する時期の住居跡が付近に分布するであろう。

井戸

014、015 の 2 基が検出され、祭祠に伴う一括の土器が出土した。014 から出土した祭祠土器の口縁は鋤先や逆 L 字形の口縁で丸みをもつ「く」の字には不然ない。とくに下部から完形で出土した 44 の壺はやや古相を示すように思える。弥生時代中期後半～末の時期を考えておきたい。上記のとおり中期末には環壕が掘削され、関連が留意される。なお、この井戸は下層の砂礫層まで深く掘削され、水がしみ出たと思われる八女粘土との層界で祭祠が行われている。

015 も一括遺物から 8 世紀後半代の時期を考えておきたい。總柱建物の 017、018 (SB) や隣接の第26次調査の人溝と同時期の可能性がある。未だ調査例が少なく周辺の状況は明らかでない。

掘立柱建物

017、018 はともに 2 × 2 間の總柱建物である。柱穴から出土した土器からは明確な時期は決めがたいが主軸を南北に向ける事、掘り方が方形である事、015 (SE) との集落としての関わりが考えられる事などから奈良時代の可能性を示しておきたい。

溝

005、009 ともに出土遺物が少なく、また延長と他の遺構との関連が判らない為、時期は決めがたい。005 は古墳時代後期から奈良時代までに遺物等から考えられるが、その削平の深さ、017 (SB)

との切り合い関係等から古墳時代の可能性が高いように思える。その場合、以北から古墳時代後期の住居跡が無く、集落の境との関連も示唆される。009は細片少量ながら青磁片を含むことから中世の可能性がある。013 (SC) 壁付近から時期が遡るが土師壺や黒色土器(81~84)も出土し、建物の復元はできなかったが、柱穴のなかに当該期のものを含むと考えられる。

土壤

003からも遺物がほとんど出土せず、時期は決めがたい。類似した形態に南八幡遺跡群第2次、第3次調査の「豎穴」がある。これは古墳時代後期と奈良時代の豎穴住居跡と混在して分布している。土壠墓の可能性もあるが、さらに類例を待ちたい。

PLATES



造構完掘状況（南東から）



調査区南部完掘状況（北から）

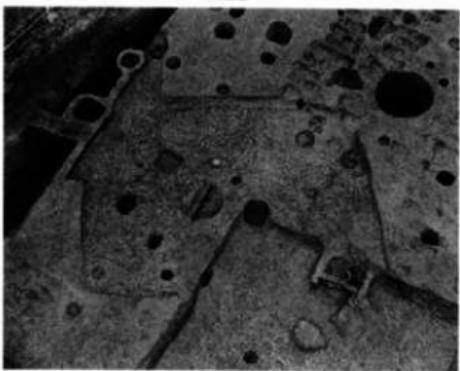
PL. 2



001 (SC) 完掘状況 (南から)



011 (SC), 012 (SC) 完掘状況 (北から)



007 (SC) 完掘状況 (南から)

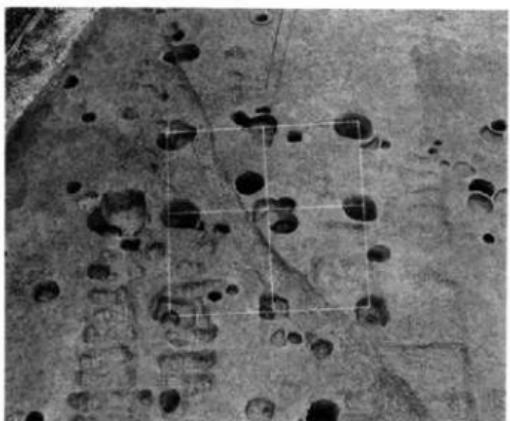


013 (SC) 完掘状況（東から）



013 (SC) カマド完掘状況（南から）

PL. 4



017 (SB) 完掘状況 (南から)



018 (SB) 完掘状況 (南から)



014 (SE) 遺物出土状況 (北から)



014 (SE) 下部遺物出土状況（東から）



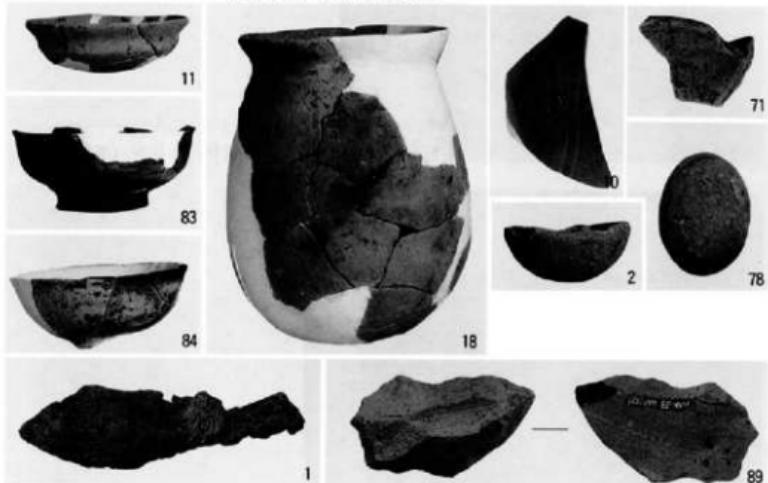
015 (SE) 遺物出土状況（東から）



003 (SK) 完掘状況（西から）



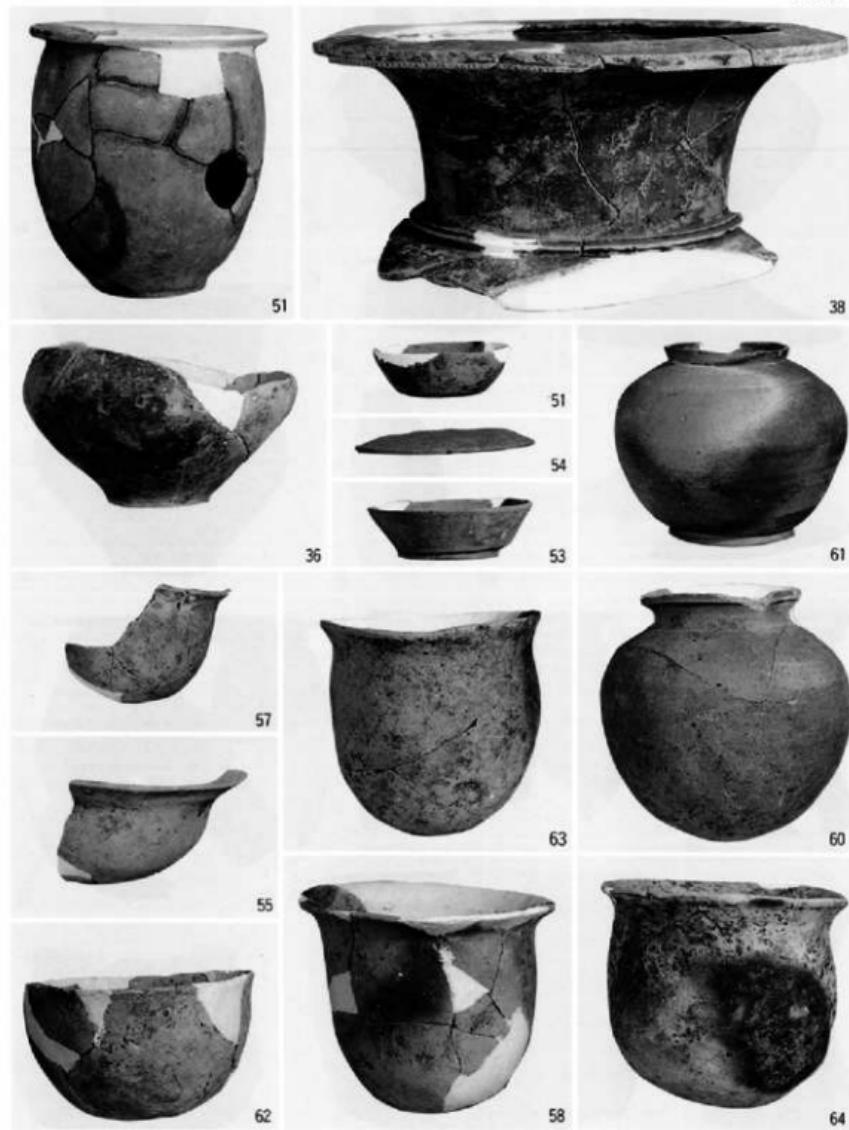
009 (SD) 断面 (北から)



出土遺物 (SC、SK、SP)



014 (SE) 出土遺物



014、015 (SE) 出土遺物

那珂遺跡 9

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第364集

1994年（平成6年）3月15日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号

印刷 赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門一丁目8番34号

